

椋鳩十作「軍神につづく横山少年團」成立の背景に関する資料

内山三枝子

(大学院発達教育学研究科
児童学専攻)

棚橋美代子

(児童学科教授)

はじめに

椋鳩十の児童文学研究において、1984年に長谷川潮により報告された²¹⁾ 椋のルポルタージュ「軍神につづく横山少年團」(『幼年倶楽部』、大日本雄辯會講談社、1944年1月号)によって、椋作品の再検討が迫られている。椋は、厳しい戦時下において、戦意高揚に繋がるものを一切書かなかった稀な作家であり、「動物小説という形をとって命の貴さとか、生きる事の意味を訴え続けてきたヒューマンな作家だった。」²⁾と言われ続けてきた。しかし、問題となっている「軍神につづく横山少年團」は、好戦的な文章で綴られている。鳥越は「この作品が椋児童文学にとっては大きな汚点であり、マイナスにつながるもの…」²⁾と述べているが、「マイナス」「汚点」とするところに、これまでの椋評価の大きな偏りと甘さがあることを指摘したい。「軍神につづく横山少年團」執筆の事実、新たな椋作品への理解、思想性への解明に繋がり、椋児童文学研究は深化すると考える。

椋の作品「軍神につづく横山少年團」について、取り上げているのは現在、長谷川潮、鳥越信、鈴木敬司の3名のみである²²⁾。しかし、いずれもこの作品に対して事実確認の域を出ず、鳥越信は、この作品の存在が明らかになった以上「椋鳩十の児童文学を研究する者にとって、必ず視野に入れなければならないものであり、わずか一作とはいえ、きわめて大きな意味をもったもの、ということになる」³⁾と述べているが、その分析には至っていない。

また、鈴木敬司は当時教師であった自身の経験も重ねあわせ、椋が「報道記事」を書かざる

を得なかった心境が推察できるとして、椋を擁護する立場から抜け出せない状況にある。長谷川は、この、「軍神につづく横山少年團」の一作で椋を批判するつもりはないとしながら、「椋のような人ですらそういうことがあった、「あの時代」の恐ろしさを強調したいとは思っているのである。だが、忘れてならないのは、執筆者における苦慮や葛藤がいかなるものであれ、子どもと読者はそういう文章を額面どおりに受け取り、感動し、自らを奮起させ、軍国少年化していったということである。」⁴⁾と述べている。

このように、現段階で3者は、「軍神につづく横山少年團」を椋鳩十研究の中でどのように位置づけ理解するかを述べるには至っていない。

作品「軍神につづく横山少年團」を理解するためには、執筆した時期や社会状況、椋の身辺などについての事実関係を明らかにし、この作品の成立背景を解明しなければならない。そのための作業として、先ず資料収集を行った。

本稿は、その資料をまとめて提示するものである。尚、資料の文中のルビは省略した。

1. 「横山少年團」に関する資料

- ① 地方新聞「鹿兒島日報」(現南日本新聞)掲載記事 (○は、読み取れない文字。以下同じ)

資料1: 「鹿兒島日報」昭和17年12月8日

7面: 見出し: 「軍神展墓繼走 慰靈祭と道場開き 横山少年團」

記事: 「軍神の生家を中心として、町内の少年たちの感激に依り、結成された横山少年團では、感激も一入新たに、同少年團後援会の援

助に成る二中通の横山少年團道場に於いて、午後三時から、同後援會主催の下に軍神横山少佐始め下荒田、天保山兩町出身の戦死者慰靈祭を道場開きを兼ねて厳修、ついで午後四時より、軍神展墓繼走を開催の筈である。この繼走は、同少年團を四班に分ち、各班より五名一組づゝの選手を出して少佐生家を出發點並に決勝點とし、第一走者は、少佐母堂タカ子刀自より、玉串をいたゞき、それをバトンとして郡元町涙橋上の少佐墓前に奉納奠し、往復四軒を繼走して、眞摯敢闘の少年の意氣を發揚し、以って軍神の英靈を慰めることになってゐる、同少年團の指導者山下流之助氏、後援會長宅間嘉吉氏、同副會長安田善義氏ら以下團幹部は萬全の準備に精進してゐる。」

資料2：「鹿兒島日報」昭和17年12月9日

2面：見出し：「仰ぐ軍神横山少佐」「本社募集の讃歌も高らかに」

記事：「輝く大東亞戦争一周年にともなふ眞珠灣特別攻撃隊九軍神一周忌の祥月命日、その一員たる横山正治海軍少佐を生める郷土では感激も一入にして鹿兒島市下荒田町の軍神の生家には午前八時半、薄田知事の訪問をはじめ、軍神の英靈に参拜客相次ぎ、母堂タカ子刀自（六九）令兄四郎氏（三〇）以下遺族を親しく慰問、郡元町なる軍神の墓には母校二中池田校長以下全職員生徒の参拜、母校八幡校始め各學校、海洋少年團の参拜、そのほか一般故殊に少國民らの参拜相次ぎ、また母校二中では鹿兒島信用組合プラスバンドで母校八幡校では全兒童の合唱をもつて、本社募集芳賀武作詞、古關裕而作曲のあの感激の讃歌“あゝ軍神横山少佐”が演奏されたのをはじめ、その他各學校においても讃歌を高らかに軍神の偉勳を讃え、なほ兩母校横山少年團の各種催しなど感激の嵐に包まれた」

資料3：「鹿兒島日報」昭和18年12月9日

2面：見出し「横山少年團」・見出し「道場で慰靈祭」

記事：「『軍神につゞけ』の旗幟のもとに組織された鹿兒島市横山少年團では、大東亞戦争二周年記念の八日午後四時から下荒田、天

保山兩町戦歿者慰靈祭を同團道場で執行 宅間後援會長の大詔奉讃ののち祭典にうつり遺族横山タカ子さん他各遺族等の玉串奉奠があり副団長○田光照君の「軍神横山少佐」の奉納詩吟などがあって、五時半終了した。」

② 書籍に記載された「横山少年團」

資料4：澤村勉『脚本「海軍」—附 鹿兒島・江田島—』青山書院、1943年

「横山家のすぐ傍に、新しく結成された横山少年團の事務所があり、その建物の上には、いつ仰いでも美しい日章旗が、明るい冬の空を泳いでゐた。」(p226)

資料5：牛島秀彦『九軍神は語らず』講談社、1990（初版1976）

「そう語る正藏氏によれば、当時、町名を「横山町」にしようとか、「横山神社」を建立しようという地元の熱烈な声と、一部の動きもあったそうだ。／そして、下荒田町内会では、「横山少年團」が組織され、「郷土が生んだ軍神につづけ！」と誓い合った。」(p131～p132)

③「横山少年團」元団員への聞き取り調査

資料6：「横山少年團」元団員：軸屋昭二氏（昭和2年生れ）・北統一郎氏（昭和4年生れ）

i「横山少年團」について

軸屋氏：「横山少年團」の創立時期は、昭和17年12月前後頃と思うが、設立後の入団であつたので、明確ではない。終戦と共に消滅。中学同級生の栗田団員の勧誘で入団。軸屋氏は、鹿兒島商業學校（通称鹿商）入学時（昭和15年3月頃、13歳）下荒田地区に転居したので、小学校も八幡小学校ではなく、地域情報はなかった。在団したのは、6～7ヶ月くらいの間。（昭和18年8月の16歳時に、甲飛入隊をしたので、その前までの間）氏の退団後から昭和20年8月終戦までの2年間は、少年團の活躍全盛期であつたと思われる。

昭和17年、総理大臣東條英機他各大臣の横山宅への表敬訪問があり、同年12月8日の「大詔奉戴1周年」を機に「横山少年團」創立の氣運が盛り上がり、山下流之助氏の誘導により創立されたと思う。山下流之助氏は、

毎日新聞社出身で、当時は鹿児島日報社（現在の南日本新聞社）に勤務しており、終戦後は鹿児島新報社に移籍した。少年団については、山下氏他、団員父兄が応援したようである。

「横山少年団」の後援会事務所と「横山少年団道場」は同じ場所であった。「横山少年団」後援会長の宅間嘉吉氏（宅間嘉孝君の父親）が貸家のうちの1軒を開放し、それを使用していた。約20坪ほどあった。宅間嘉吉氏は、荒田地区の資産家で市会議員として昔から有名人であった。辺りに多くの貸家を持っていた。団員は7歳くらいから15歳位までの少年たち。軸屋氏の在団時、中心となって活動していた少年たちは（「軍神につづく横山少年団」に紹介されていた宅間嘉孝さん・軸屋昭二さん以外で）、団長の川原正美さんや長崎一男さんら上級生。北さん、新保さん兄弟なども活躍していた。兄弟で入団している子どもが多かった。当時の少年たちは、「横山正治少佐」を、郷土鹿児島出身の軍神として崇拝していた。

北氏：少年団を作るきっかけとなったのは、山下流之助氏。成人になって山下信一郎と改名。戦後、伊知地姓となる^{注3)}。少年団活動は、先輩達の自主的な努力で行われた。6、7歳から17歳くらいの少年たちが所属。旧制中学の4、5年生が指導者。北氏は、指導者や先輩に勧められて入団。10歳後半から13歳頃まで在団。椋鳩十氏が取材に来たのは聞いたことがあるが、北氏自身は取材を受けていない。「横山少佐」は素晴らしい、立派な礼儀正しい人であった。北氏の生家が横山家の向かいだったので、少佐が帰省した折には、いつも挨拶に来られていた。

ii 「軍神につづく横山少年団」（『幼年倶楽部』1944年1月号、大日本雄辯會講談社^{注4)}）の内容及び掲載写真について

軸屋氏・北氏：p 27の「…ラジオをいっしんにきいてみた二人の少年がありました。そして二人は、…」というこの少年たちは、川原正美、長崎一男両氏と思われる。両名とも、戦後亡くなった。p 28の写真の先頭は、宮原さん。

駆け足は、いつもやっていた。p 29の中学生は、長崎一男さん。p 31の写真の神社の鳥居は近くの荒田八幡だと思う。妙円寺参りは、旧暦9月4日（現在では、10月25日頃）に行われる。p 32の写真は、天保山の海岸。団員の父兄で船所有者がいた。p 34の写真は、昭和18年12月頃のものではないかと思う。予科練の制服を着て飛行機を持っているのが、宅間嘉孝さん。同じく制服を着て向かい合っているのが、軸屋昭二さんである。この予科練の制服は冬服。

資料7：写真1：「横山少年団」団員、椋鳩十氏、「鹿児島日報社」社員3氏の写真（撮影日不明）



写真1

資料8：写真2：椋鳩十氏と「鹿児島日報社」社員3氏^{注5)}



写真2

写真1、2 かごしま近代文学館所蔵

資料9：「横山少佐」生家、「横山少年団」の場所を示す略図^{注6)}

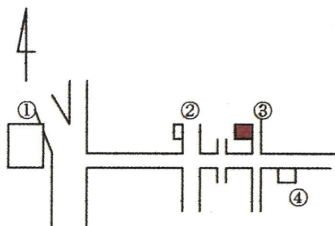


図1

- ① 鹿児島県立甲南高等学校（旧鹿児島県立第二鹿児島中学校）
- ② 鹿児島市交通局
- ③ 横山正治少佐の生家
- ④ 横山少年団道場のあった場所

資料10：生家前に「軍神横山少佐宅」の立て札

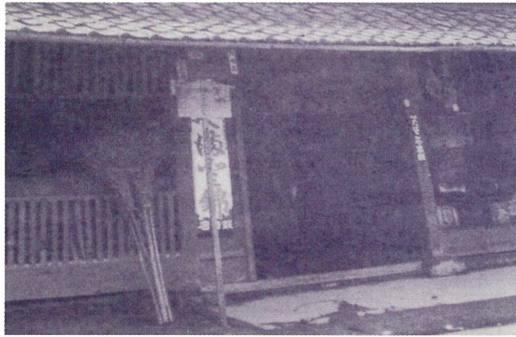


写真3

鹿児島県歴史資料センター黎明館所蔵

2. 「九軍神」, 「横山正治」少佐に関する資料^{注7)}

① 書籍・葉

資料11：鹿児島県立第二鹿児島中学校書記松本 暎次郎編、『報國團雑誌』—軍神横山少佐記念號—第三十三號，鹿児島県立第二鹿児島中学校報國團，1942年7月31日（鹿児島県特高課・鹿児島海軍人事部閲済）

資料12：「挨拶状」鹿児島県立第二鹿児島中学校報國團長池田俊彦氏の挨拶状，1942年7月

資料13：『軍神横山少佐』，鹿児島県教育會編・発行，1942年12月1日（海軍省・鹿児島地方海軍人事部・鹿児島県特高課閲済）

資料14：「映畫 海軍」大本營海軍報道部企畫・海軍省後援，松竹株式會社製作・松竹京都撮影所撮影（「海軍」の映画フィルムに添えられた葉），1943年9月15日（海軍省閲済）

資料15：「鹿児島二中のあゆみ」・「横山正治少佐」，『君故山に暎れ』甲南高校創立八十周年記念誌—鹿児島県立第二中学校同窓生戦没者追悼録一，甲南高校創立八十周年記念事業実行委員会編・発行，1986年8月15日，p6-15・p400-403

資料16：千早誠，「横山少佐のこと」，『樟風遙か』

甲南高校創立百周年同窓会記念誌，鹿児島県立甲南高等学校創立百周年記念事業同窓会実行委員会編・発行，2006年11月3日，p94-95
資料17：「昭和十七（一九四二）年度・〔二中〕・太平洋戦争と「海軍」」，『甲南』創立百周年記念誌，鹿児島県立甲南高等学校編・発行，2007年3月31日，p176

② 新聞^{注8)}

資料18：「朝日新聞：東京」1942年3月7日

1面：見出し：「殉忠古今に絶す軍神九柱 偉勳輝く特別攻撃隊 挺身 布哇真珠灣を強襲」「特別攻撃隊の呼び方」「感狀授與忠烈を中外に宣揚せり」「九勇士二階級を特進」（九名の顔写真掲載）「今ぞ征く水づく屍 敵艦底へ肉薄の猛襲 艇人一體，從容死地へ 平出大佐放送」「必殺」（「松添畫伯繪く白晝攻撃」の絵を掲載）「宿望達し歸らず」「自若，征途に 還らぬ門出に隊員勇〇 感激悲壯の一瞬」「蔭に母の感化 尊し大和魂」

海軍省発表の「感狀」（東京 朝日新聞 1面）

「感狀授與 忠烈を中外に宣揚せり」

海軍省発表（昭和十七年三月六日午後三時）
昭和十六年十二月八日布哇海戦において，特殊潜航艇を以て布哇軍港に突入し，偉功を奏したる特別攻撃隊に對し聯合艦隊司令長官より左の通り感狀を授與せられ，右の旨海軍大臣より奏上せり

感狀 特別攻撃隊

昭和十六年十二月八日開戦劈頭，挺身米國太平洋艦隊主力を布哇軍港に襲撃し，友軍飛行機隊と呼應して多大の戦果を挙げ，帝國海軍軍人の忠烈を克く中外に宣揚し，全軍の士氣を顕揚したるはその武勳拔群なりと認む
仍て茲に感狀を授與す

昭和十七年二月十一日

聯合艦隊司令長官 山本五十六

資料19：「鹿児島日報」1942年3月7日

1面：見出し：「遂に還らざりし特別攻撃隊勇士」「盡忠無比，不滅の偉勳 九軍神真珠灣頭の花と散る 岩佐大尉以下の偉勳に二階級進級」（九名の顔写真）「海軍省発表（三月六日午後三時）」（「特別攻撃隊の敵艦襲撃想

像圖」(松添書伯筆)海軍省許可済第五七一號の写真掲載)「軍神自らの着想 山本提督成功を認めて許容す 壯烈なりし攻撃状況」「肉親達にも秘して 訓練に血の精進 “死”のみに生きた九軍神」「一筆一語に籠る 誠忠決死の覺悟 眞珠灣で軍神らの絶筆」「中に若冠廿三の 薩摩隼人横山少佐 殉忠九勇士の人となり」^{注9)}

(「特別攻撃隊員の絶筆」,「あゝ横山少佐 (少尉時代の面影)」上半身の写真掲載)

資料20:「鹿兒島日報」1942年3月8日

2面:見出し:「嗚呼軍神横山少佐 全縣民唱和の讃歌懸賞募集 鹿兒島日報社」^{注10)}

3面:見出し「崇高な殊勲、あゝ横山少佐 聖將生める鹿兒島に 大東亞戰の若き軍神 郷黨を擧げて感激一しは深し」写真掲載(「自宅英靈前に感慨深い母堂 向つて左は母堂を助けて家業に勵む令兄四郎氏」)「亡父も日露役の勇士 兄弟揃つて殉忠 他の令兄も奮戦中の軍人家庭」「ようこそお役に! 感慨深き母堂タカさん」^{注11)}「軍神の遺稿「御親閤を拜受して」二中時代」「母堂へ最後の便り 叔父さんには別れの寫眞一葉」「日本精神乃極致 東郷元帥の若き再來 海軍人事部長石川大佐談」「嗚呼軍神横山少佐 安田尚義」(歌、の掲載)「不屈の海軍魂尊し 武勲にあやかり益々士氣を鼓舞 椎名聯隊區司令官談」「まさに神兵 ただ感謝感激の極み 久米鹿兒島市長語る」「軍神横山少佐を恩師に聞く 訓育の活模範 池田二中校長語る 小濱、尾上兩教諭談」「遺風を頌つ 西八幡國民學校長談 少年の頃 日置訓導談」「町内の譽れ 龜澤町内會長談」

資料21:「鹿兒島日報」1942年3月10日

2面:見出し:「横山少佐の遺烈を偲び 町内會や母校の集ひ 弔問客つゞく軍神の家」

資料22:「鹿兒島日報」1942年3月11日

3面:見出し:「軍神横山少佐の官記 海相代理より傳達 皇恩の無窮に感激のその母堂」「海軍大臣代理石川人事部長の横山少佐宅へ位階傳達」(様子を写した写真掲載)

資料23:「鹿兒島日報」1942年3月18日

3面:見出し「軍神横山少佐 讃仰日に聚まる 煙草販賣界の感激 上林局長ら代表の弔問」「武勲萬古に輝く 軍神横山少佐展 四月三日より十日間山形屋六階で 本社主催」^{注12)}

資料24:「鹿兒島日報」1942年3月19日

3面:見出し:「軍神横山正治少佐展 四月三日より遺品を蒐集陳列 本社主催山形屋で開く」^{注13)}「軍人横山少佐の忠誠顯彰協議會 縣で十九日午後開く」

資料25:「鹿兒島日報」1942年3月20日

3面:見出し:「軍神横山少佐の 寫眞手紙 訓育資料に 本縣下全學校に配付」^{注14)}

資料26:「鹿兒島日報」1942年3月22日

3面:見出し:「軍神横山少佐を讀ふ 讃歌陸續と集る 本社編輯局に玉篇の山」「郷黨の大感激もて 力作雄篇出でよ 加藤本縣學務部長談」

資料27:「朝日新聞:東京」1942年4月2日

2面:見出し「首相軍神の靈前に合掌 西下の東條首相三十一日鹿兒島に軍神横山正治少佐の生家を訪れ懇ろに弔問した=西部本社電送」(東條首相の弔問の写真掲載)

資料28:「鹿兒島日報」1942年4月3日

3面:見出し「軍神横山少佐の 遺芳を後昆に傳ふ 縣に顯彰會を設置」^{注15)}「嗚呼軍神横山少佐展 遺品、遺墨を陳列し武勲を偲ぶ 本社主催三日より山形屋六階」「横山少佐慰靈祭 けふ山形屋で」

資料29:「鹿兒島日報」1942年4月5日

2面:見出し:「軍神横山少佐慰靈祭 タカ子母堂始め遺族來賓參列 三日山形屋横山少佐展」^{注16)} (写真掲載)

「鹿人の軍事映畫 五日二時半山形屋演舞場で」「軍神讀ふる短歌 縣歌人會で募集す」

資料30:「鹿兒島日報」1942年4月9日

2面:見出し:「九軍神に感謝 高野山特使を派遣」「軍神を追慕して 軍神横山正治少佐 永えに生くる歡び 竹下大將遺族慰問」(写真掲載)「活きた訓話で 青少年激勵 商船校生少年團視閲 竹下大將」「顯彰會に 市米穀商組合が一干圓」

資料31:「鹿兒島日報」1942年4月10日

2面：見出し「軍神横山正治少佐の 英靈郷土へ還る 十日朝九時十分鹿兒島驛へ」「九軍神海軍葬の盛儀 日比谷葬儀場に着いた葬列（上）と岩佐中佐喪主テル刀自の禮拜」（写真掲載）「英靈大阪を出發」

資料32：「鹿兒島日報」1942年4月11日

2面：見出し「あゝ軍神横山正治少佐 郷黨あげて盡きぬ感謝の誠を捧ぐ 永えに輝き響る若櫻 英靈今ぞ故山に還る」「懐しの郷土へ まづ嚴かな慰靈式」「奉拜者たゞ感涙に咽ぶ」「今ぞ安らかに 英靈生家に還る」〈写真掲載：軍神横山少佐の英靈郷土へ（上）鹿兒島驛に迎ふる郷黨の大感激（下）下荒田町の生家へ、軍神の遺影を捧ぐるは戦友有馬海軍中尉、英靈を抱けるは長兄正藏氏、つゞいて母堂タカ子刀自」「軍神の母の感激 あつい御同情に 御禮の言葉も有りません」「軍神の遺志を 繼いで報國の至誠を捧げる 英靈護る有馬中尉談」^{注17)}

資料33：「鹿兒島日報」1942年5月8日

3面：見出し「若櫻のかほりいや高し あゝ軍神横山少佐の歌 けふ命日に發表 一等に川邊郡知覧町の芳賀氏 作曲コロンビヤの古關氏に依嘱」（応募、438篇）「一等入選歌 川邊郡知覧町 芳賀武」（歌全文を掲載）「自らの含蓄と品格 選評 審査員代表川出七高教授談」

資料34：「鹿兒島日報」1942年5月19日

3面：見出し「軍神横山少佐の 讃歌作曲成る 作曲家古關氏の手で」（「あゝ軍神横山少佐」の歌詞と楽譜を掲載）

資料35：「鹿兒島日報」1942年5月20日

2面：見出し「軍神横山少佐讃歌 壯重の名曲好評 母校二中で指導開始」

資料36：「鹿兒島日報」1942年5月22日

3面：見出し「軍神横山海軍少佐 『けふ』市葬の盛儀 午前十時より七高校庭」「あゝ軍神横山少佐 感激の讃歌發表會 本社主催海軍記念日に開く」「讃歌の楽譜 縣下全學校に寄贈（「軍神横山少佐」写真掲載），「歌ひ初め 練習 軍神母校の… 八幡國民學校」「軍神横山少佐の墓 先塋の墓地擴張

教育會で記念出版刊行」「“昔の軍神と今の軍神” 伊集院中學で池田二中校長講演」

資料37：「鹿兒島日報」1942年5月23日

2面：見出し「軍神横山海軍少佐 公葬の盛儀營まる 大偉勳を讃ふる此感激」「眞珠院の 法名白木に香る」「葬送行進 靈輿生家を出づ」「葬儀開式 感激は彌や深し」「偲ぶ偉勳 谷本長官も熱涙」（「写真説明」『（上左）葬儀場全景（同右）葬列七高前を進む（中右）遺族席、前列右より長兄正藏氏、タカ子母堂、三兄正利氏、ほかは親戚（同左）久米市長の祭文朗讀（下）海相代理谷本佐鎮長官の焼香』の説明書きと共に、5枚の写真掲載）

資料38：「鹿兒島日報」1942年5月27日

3面：見出し「あゝ軍神横山少佐 感激の讃歌發表會 本社主催 けふ午後二時より市公會堂で」「一段の奮進誓ふ 讃歌發表會にも滿腔の謝意 薄田本縣知事は語る」「出演學校から進行係 お出し下さい」「お願い」

資料39：「鹿兒島日報」1942年5月28日

3面：見出し「感激と興奮の坩堝 軍神讃歌發表會 本社主催最も盛大に開催さる」「芳賀氏來電」「鶴女同窓會 三十一日開催」「軍神横山少佐讃歌の發表會（本社主催鹿兒島市公會堂にて）」（一）立錫の余地なさ大聴衆席（二）軍神母校八幡國民學校児童ハーモニカ大合奏（三）鹿兒島室樂協會員野田保子さん、愛甲ツナ子さんの獨唱（四）軍神母校二中生徒の齋唱（五）一高女生徒の六部合唱（六）男師生徒の二部合唱（七）女師、二高女生徒の三部合唱：説明と共に7枚の写真掲載）

資料40：「鹿兒島日報」1942年12月8日

5面：見出し「軍神横山少佐を偲びて 池田二中校長手記」「軍神の母豊けき心 ゆかりの『隼』を可愛がり乍ら 記者と語る横山少佐母堂」

7面「軍神の母校 二中」「八幡校」・資料1

資料41：「鹿兒島日報」1942年12月9日

2面：見出し：「必勝第二年の新發足へ 郷土の催しに感激沸る」「あの日あの刻の感激を新たに 照國神社に祈願 早朝から参拜者が殺到」「聖戦一周年記念に“海の子”の海

上鍛錬 商船校」「荒田八幡 祈願祭」「女附幼稚園児 墓地に参拜」(「(下) 軍神横山少佐の墓前に額く国民学校児童」：写真掲載)、「軍神横山少佐 讃歌集 歌人会より奉呈」「仰ぐ軍神横山少佐 本社募集の讃歌も高らかに」

3. 「九軍神」関連の3作品^{注18)}

資料42：「あ、特別攻撃隊」(詩)西条八十、『少年倶楽部』、大日本雄辯會講談社、1942年4月号、p178-181

資料43：「古橋海軍中佐に特別攻撃隊のお話を聞く」、清閑寺健、『少年倶楽部』、大日本雄辯會講談社、1942年5月号、p66-75

資料44：『特別攻撃隊九軍神エバナシ』伏石繁男画、田川英子文、日本絵雑誌社、1942年^{注19)}

4. 「少年飛行兵」^{注20)}

資料45：『寫眞週報』情報局編輯、1943年9月15日(表紙のキャッチフレーズ：お父さんお母さん ボクも空へやって下さい)

資料46：『航空少年』緊急増刊・陸軍航空本部指導・少年飛行兵號、誠文堂新光社、1943年、9月20日

資料47：「狩り出された幼い心と身体」(写真掲載)、『1億人の昭和史』3・太平洋戦争 死闘1347日、毎日新聞社、1976、p118-119

6. 「郷中教育」

資料48：『創立百周年記念誌』財団法人研明舎編集・発行、1978年11月26日

資料49：『研明舎創立百二十周年記念誌』財団法人研明舎編集・発行、1999年4月

資料50：『四方学舎要覧第四輯』新四方学舎発足三十周年記念誌、四方学舎、1999年11月

資料51：「朝日新聞」2008年8月10日
33面：「目覚めよ『薩摩DNA』鹿兒島 郷中教育でリーダー育む」

解 説

棕鳩十が執筆した「軍神につづく横山少年團」成立の背景となる事象についての資料をここに整理し提示した。

これら提示した資料からは、1942年3月6日の大本営発表により、「九軍神」が大々的に報

じられた時期から、棕の「軍神につづく横山少年團」の成立時期^{注21)}と考えられる1943年11月から12月頃までの戦況が読み取れる。

先ず、1942年3月7日の各新聞1面には、「九軍神」の文字と写真が大々的に掲載され、「あゝ壯烈」「殉忠」「勇士」「偉勲」などの文字が紙面を覆っていた。牛島は、この時の様子について、各紙の記事を紹介しながら、「このように、新聞が、そしてラジオが、最大級のボルテージで、「九軍神」を称え、国民の士気を煽り、そして、感涙をさそった。」⁹⁾と述べている。「九軍神」の一人である横山正治少佐の出身地鹿兒島においても、地方新聞「鹿兒島日報」は、連日のように、鹿兒島が生んだ「軍神横山少佐」についての記事を掲載している。記事資料の数を見るだけでも、当時の人々の興奮と熱狂ぶりが想像できると共に、人々が「第二第三の横山少佐」として後続くよう、感激と興奮を煽り続ける新聞報道の意図が見えてくる。当時の新聞について、山中は「日本には言論の自由はなかった」⁶⁾という言葉で断言している。「明治期以降、日本の新聞は「新聞紙法」などで統制された。同法は「安寧秩序」や「風俗」を乱す新聞の発売禁止を認め、軍事、外交に関し陸海軍大臣と外相に記事の掲載禁止権を与えていた。／37年7月に日中戦争が始まると、政府と軍は国内を戦争体制に変質させていった。／翌38年には、戦時統制を完成させるための「国家総動員法」を制定。41年1月には同法に基づく「新聞紙等掲載制限令」が施行される。」⁷⁾という歴史のもと、朝日新聞「新聞と戦争」取材班は「言論・報道機関としての朝日新聞は日中戦争が深まる中で窒息した、…」⁸⁾と述べているが、新聞界全て同様であった。

資料11、13、14については、「海軍省」、「鹿兒島地方海軍人事部」、「鹿兒島縣特高課」等の「検閲済」の記載があり、これらは、当時の海軍関係者及び事象を記載した出版物に対する検閲の厳しさを表している。資料14の「海軍」の映画フィルムに添えられた葉には、大本営海軍報道部・海軍少佐濱田昇一による、「映畫『海軍』製作に際して」の文書の中に「…昨年『ハワ

イ・マライ沖海戦』を膾炙つたのもこの映画により大いに国民の士気を昂揚せんとする意圖に出たものであった。…（中略）…今や皇軍の興廢を賭しての決戦下、軍神につづける聲は全国津々浦々に国民の聲となり、ひたむきな決意となつて漲りつつある。…」(p1) という文書が添えられている。さらに、同じく大本営海軍報道部の海軍少佐庄田満洲五郎は「映画『海軍』に期待する」と題して、「…今こそ國民は渾身の勇を揮ひ、旺盛き戦意を以て斷呼として敵を撃滅しなければならぬ。國民士氣の昂揚、不動磐石の精神の涵養こそ刻下喫緊の問題である。／遠くハワイの眞珠灣底に 天皇陛下の萬歳を三唱して散華した盡忠特別攻撃隊、その全貌を描き、その忠烈を傳へんとする映画『海軍』は、斯かる極めて重大なる時局に國民の前に公開されんとする。／帝國海軍傳統の精神とその氣魂を正確に把握し之を描破せんとするこの映画は、同時に 天皇の海軍を映画に顯現せんとする前人未踏の境地を開拓せんとするものである。…」と記している。いずれも、この映画をもって、戦意高揚を図り、「不動磐石の精神の涵養」を推し進めようとする意圖が明確である。

牛島は、「九軍神」の発表が3ヶ月も遅れたことについて、「緒戦（眞珠湾攻撃）の戦死者の扱いを、いかに効果的にして、全国民の士氣（戦闘意欲）をかきたてるかに、当局が腐心したせいである。」⁹⁾と述べているが、1943年代の厳しい戦況下においても、さらなる戦意高揚を図り、志願兵を募るため、当局は岩田の小説『海軍』の成功を「映画」というメディアに仕立て直したのである。このように、「九軍神」や小説『海軍』の主人公のモデルとされた「横山正治少佐」は、「軍神」として奉られることで国民の「戦意高揚」やさらなる「特別攻撃隊」の士氣昂揚のため、広告塔の役目を担わされたのである。このことは、牛島が、1976年『九軍神は語らず』執筆のために横山正治少佐の生家取材訪問した時、長兄正蔵氏が役所に行った時のことを、「…係り人々が、いままでは、そりゃ軍神一家で、何でん特別扱いじゃったろう

が、もう時勢が変わったけん、昔のごとはいきませんゾと…（中略）…わたしゃいままでも何か悪かことばしたのか、弟の正治は時代が変わっただけで、軍神から悪者になったんかと思ひました…」¹⁰⁾と述べたことから頷ける。

しかしながら岩田豊雄（獅子文六）は、「小説『海軍』を書いた動機」¹¹⁾として、「ハワイとマライの戦ひは、故國空前の大戦到るといふ意識と共に、僕の胸に劇薬で灼いたように灼きついてしまった。…（中略）…自分の感激をそのまゝに放置し難かった。…」¹²⁾と述べている。同様に牛島も、「当時の表現で言えば、若き「九軍神」の七生報國の尽忠の精神に、全国民は、感泣し、嵐のような賛辞、景仰が、澎湃として各地、各界から湧き起こった。／新聞各紙では、軍人が、学校が、小説家、歌人、詩人が、そして「少国民」までが、「九軍神」を称えた。」¹³⁾と記し、軍人や学者の賞賛の言葉、歌人の詩歌、少国民の作文などを14ページに渡り掲載している¹⁴⁾。

当時の人々は、「仁義忠孝」といった儒教的な思想を基盤とした教育や文化の中で育っている。従って、「九軍神」や「横山少佐」を称える新聞報道、出版物、映画に、人々の心は呼応し益々「尊王愛國」の精神へと傾倒していった。これらは、知らず知らずのうちに当局によって仕向けられたことでもある。

分けても、横山少佐の出身地鹿児島では、薩摩独特の伝統的な「郷中教育」がそれを一層強固なものにしていったと考えられる。「横山少佐」は、「互いに文武を励み、心身を鍛錬し、廉恥を重んじ、礼節を尚び、長幼の序を正し、艱難相救い、荒怠相戒め、士道を磨いた。」¹⁴⁾とする「郷中教育」を受け継ぐ鹿児島の風土の中で育った。従って、「横山少佐」の「殉忠」「至誠」の精神は、薩摩の教育により育てられ、薩摩の人々が深く共感するものであり。それ故人々は、「第二、第三の横山少佐たらん」とするのである。同時期、椋も鹿児島に暮らしていた。明治生まれの椋も、こうした時代の中、薩摩の気風に何らかの共感を持ったことは想像に難くない。また、それを思わせるような記述も

あった。

1943年には、戦局は益々悪化し、5月には、アッツ島守備隊が玉砕した。「わが前線や基地を攻撃してくる敵は百機、二百機、或ひはそれ以上の澤山の飛行機でやつてきてゐます。」¹⁵⁾とあるように、「最近の苛烈な戦局を直視する時刻々火花を散らす空の決戦が、帝國の存亡、東亞の興廢を賭してゐることがひしひしと感ぜられる」¹⁶⁾といった戦況であった。従って、当時の日本の軍部は多くの飛行機を作り、多くの飛行兵を養成して戦地に送り出さなければならないと考え、同5月には少年兵の志願者年齢を下げ、14歳からとし、少年達が「飛行兵」に憧れ、少年飛行兵となって戦いに飛び立つよう、「さあ君たちも僕等と共に少年飛行兵になろう」¹⁷⁾と、呼びかけたのである。そのため、「この年に少年飛行兵の応募旋風」¹⁸⁾が巻き起こり、多くの少年達が志願した。

以上述べたような背景の下に、椋の「軍神につづく横山少年團」が執筆されたのである。

謝 辞

今回、資料をまとめるにあたり、多くの方々のご教授とご援助を頂きました。椋嶋十氏ご子息の久保田喬彦・瑤二様、横山正治少佐のご遺族横山正照様、鹿児島県立甲南高等学校及び同窓会様、横山少年団の元団員軸屋昭二様・北統一郎様、研明舎藤崎正様、四方學舎田原茂様、鹿児島県歴史資料センター黎明館様、かごしま近代文学館様、南日本新聞社データベース部様、椋嶋十文学記念館様、鹿児島市維新ふるさと館様、椋嶋十記念館様の皆様には多くの情報と資料を提供して頂きました。皆様のご厚意に心より感謝いたします。

注

- 注1) 長谷川潮「軍神と犠牲者のあいだ—国家の戦争像と個人の戦争像」、『日本児童文学』、日本児童文学協会、1984年8月号
 注2) 先行研究リスト
 注2)-1 長谷川潮「軍神と犠牲者のあいだ」、『日本児童文学』、日本児童文学者協会編、1984年8月

- 注2)-2 鈴木敬司「椋嶋十の死を悼む」、『文学と教育の会会報』13号、文学と教育の会、1988年4月
 注2)-3 長谷川潮『日本の戦争児童文学』日本児童文学叢書1、久山社、1995
 注2)-4 鳥越信「椋児童文学研究の新しい局面を迎えて」、『椋嶋十・人と文学』、椋嶋十文学記念館、2005年3月31日
 注2)-5 鳥越信「椋嶋十と雑誌『幼年倶楽部』—椋文学研究の新しい局面を迎えて—」、『感動と運命—椋嶋十生誕100年記念誌』、椋嶋十生誕100年祭実行委員会・喬木村教育委員会・椋嶋十記念館、2005年3月31日
 注2)-6 鳥越信、「生誕100年を迎えた作家・画家たち—椋嶋十を中心に—」(2006年6月5日：於：国際児童文学館「育てる会2005年度総会記念行事 児童文学講演会」の講演録)、『大阪国際児童文学館を育てる会 会報』No. 82、大阪国際児童文学館を育てる会、2005年11月
 注2)-7 鈴木敬司『椋嶋十研究—戦時下の軌跡』、菁柿堂、200
 注3) 資料1参照「…同少年団の指導者山下流之助氏、…」
 注4) 提示したページは、「軍神につづく横山少年團」本文のもの。
 注5) 写真左から、川越氏、鮫島氏、椋氏、伊知地氏。資料7と8が撮影された日付は不明。「横山少年團」執筆のために取材した折のものと考えられる。(椋氏)着用の衣服は冬服である。服地は、(椋氏の)妹千代香さんから贈られたもので甲種国民服に仕立てられたもの。上等の服地であった。(長男、久保田喬彦氏談)この服については、長男喬彦氏は、『父・椋嶋十物語』久保田喬彦、理論社、1997、p43に、記している。
 写真に写っている伊知地信一郎氏は、「横山少年團」の指導者であり、当時南日本新聞社に勤務していた、山下流之助氏と同一人物である。詳細は、注3を参照
 注6) 地図は、現在のもの。当時の横山少年団道場前は、道幅が広く運動が十分できた。
 注7) 資料10-16のうち、12は鹿児島県立図書館、その他は全て、鹿児島県立甲南高等学校同窓会二甲記念館所蔵
 注8) 見出しのみ掲載
 注9) 記事内容：特殊潜航艇に乗り組んで敵真珠灣奥深く潜入、戦史に不滅の一頁を残して遂に護國の華と散つた殉忠無比の特別攻撃隊勇士九氏の略歴は次の通りである(中略)……同 横山正治氏
 大正八年十一月生れ本籍鹿児島市下荒田町二一、家族は母タカさん、令兄正蔵、正一郎(戦死)正利、四郎、一夫各君、令姉シジエさん、ミヨさん、エタさん、令弟末造君がある／鹿児島二中を経て海軍兵學校に進んだ、

兵學校は、第六十七期性、昭和十四年同校卒業、海軍少尉候補生として軍艦磐手乗組となり、次いで霞ヶ浦海軍航空隊附。軍艦五十鈴乗組を経て十五年五月少尉に任官、同十月軍艦長鯨乗組、十六年十月中尉に昇進今日更に少佐へと飛躍した／資性極めて明朗また豪宕淡白な薩摩隼人の氣風に富み事にあたつては烈々たる信念に燃え、知るほどの人にして少佐を賞めない者はないが而も少佐はかうした賛辞など氣にもとめず常に黙々と自己の職務に對して邁進して倦むところがなかった」

注10) 記事内容：「…空前絶後の壯舉を偲び、篤く忠魂を弔ふとともに君が誠忠の遺徳を頌ち、以て日本精神をますます發揚し、皇民の士氣をいよいよ鼓舞せんがため、…」

注11) 記事内容：兄四郎氏の言葉：「…ちっとも威張らぬい、弟でした。いつも“自分は榮達は望まぬ 潜水艦の守りと仰がれる佐久間艇長のような軍人精神の立派に練り上げられた軍人になりたいものだ、云ふようなことを申してをりました。」

注12) 記事内容：「由來大日本帝國は…中略…そして三千年來國難のある毎に大君の御爲に赤子は盡忠報國の誠を捧げ皇國神兵の逞しき勇武絶倫さを代々國史に傳へ、その忠臣義士將兵の物語は皇國史に燦然と輝き子孫を興起せしめてゐる。大君の御前に身命を捧げ奉るのは日本人の無上の光榮であり大和男子の本懷である。…」

注13) 記事内容：「…この勇士こそ忠にして孝、孝にして忠、日本精神獨得の忠孝一致『誠』の世界の體得者であると云へやう」

注14) 記事内容：「…横山少佐の寫眞に少佐最後の手紙其の他の手紙を調製して縣下の全學校に配布して訓育資料とすること…」

注15) 記事内容：「我が郷土のうめる軍神横山少佐の忠烈無比の遺芳を永久に傳へこれを國民教育の根本〇とし、國民士氣の昂揚特に薩摩精神顯揚に資するため、…」

注16) 記事内容：「鹿兒島が生んだ若き軍神、横山正治海軍少佐の壯烈無比、日本海軍の烈々たる盡忠精神を永久に顯彰する…」

注17) 記事内容：「…鹿兒島の若い人たちも軍神横山少佐の活きた教訓を光と仰ぎ明治時代の西郷、東郷大先輩の後をつがれるよう切に希つて止みません。…」

注18) 長谷川潮「軍神と犠牲者のあいだ—國家の戦争像と個人の戦争像—」、『日本児童文学』、1984・8、p13～21で提示した6作品以外の

もの

注19) 所蔵無し。未見。高橋洋二編集、『別冊太陽 日本のこころ45 絵本』平凡社、1984年3月25日、p122～123に提示あり。

注20) 桜本富雄『探書遍歴』封印された戦時下文学の発掘、新評論、1994、p75～76参照

注21) 掲載写真から、団員の宅間さん、軸屋さん共に海軍甲種飛行予科練習生となった1943年10月半ばから12月頃と推測できる。

注22) 牛島秀彦、『九軍神は語らず』、講談社、1990（初版1976）、p101～114

引用文献

- 1) 鳥越信「生誕100年を迎えた作家・画家たち—椋鳩十を中心に」、大阪国際児童文学館を育てる会 会報No. 82、大阪国際児童文学館を育てる会、2005年11月1日（育てる会2005年度総会記念事業 児童文学講演会 於：国際児童文学館講堂、2005年6月5日の講演録）、p9
- 2) 鳥越信、「椋児童文学研究の新しい局面を迎えて」、『椋鳩十・人と文学』紀要10号、椋鳩十文学記念館、2005年3月、p16
- 3) 前同
- 4) 長谷川潮『日本の戦争児童文学 戦前・戦中・戦後』日本児童文化史叢書1、久山社、1995、p42～43
- 5) 牛島秀彦、『九軍神は語らず』講談社、1990（初版1976）、p93
- 6) 山中恒、『新聞は戦争を美化せよ！』戦時国家情報機構史、小学館、2001、p33
- 7) 朝日新聞「新聞と戦争」取材班、『新聞と戦争』朝日新聞出版2008、p472
- 8) 前同、p473
- 9) 牛島、1990、p92
- 10) 牛島、1990、p134～135
- 11) 岩田豊雄『海軍隨筆』、新潮社、1943、p243
- 12) 前同
- 13) 牛島、1990、p101
- 14) 『四方学舎要覽 第四輯』—新四方学舎発足三十周年記念誌—、四方学舎、1999年11月、p4
- 15) 『寫眞週報』情報局編輯、1943年9月15日、p7
- 16) 前同、p3、文中の繰返し記号は変更した。
- 17) 『航空少年』緊急増刊号、陸軍航空本部指導少年飛行兵號、東京 誠文堂新光社、1943年、9月20日、p64～65
- 18) 櫻本富雄、『日本文学報告会』大東亜戦争下の文学者たち、青木書店、1995、p480